

## 震災後の子どもたち(17)

# テントがプールのや

守 恵一

子どもたちにとっても私にも、ジシンという

と、ほとんど阪神淡路大震災を指す固有名詞になつてしまつていますが、その地震で、駅舎が全壊したJR六甲道駅のすぐ近くに、私たちの「たつこの学童クラブ」はありました。

古い木造二階建ての建物は完膚なきまでにペシャンコになりました。

今、「たつこのこ」はその同じ処にブレハブを建て、子どもたちはそこで、元気に放課後をすごし

ています。

95年七月にブレハブを建ててから、たつこのこは、テントで学童保育を続けました。

当時の記録(たつこの通信)で確認すると、95年二月六日から、テントで地震後の学童保育を再開しています。

たつこの子どもたちの主な遊び場だった広い公園(大和公園<sup>やまと</sup>)が地震直後からテント村になりました。別の場所に置いていたので助かった数個



のテントをそこに張らしてもらって、たつのこを再開するつもりでした。

テント村のリーダーにそのことを相談すると、「そういうことなら、このテントをついたらどうですか」と大きなオレンジ色のテントの前に連れていってくれました。ある企業が提供してくれたもので、広さは十二畳以上もあり、高さも二・五メートルほどありました。支柱や梁に空気を充填して立たせているテントです。中には発泡スチロールの断熱材も敷きつめてありました。「子どもたちにつくてもろたらこのテントも生きます」。思わず聞きかえしてしまいました。「ほんまにつくてもエエんですか」。そのテントは、自前で張るつもりだったテントとは比べもんにならんくらい大きく立派だったからです。

地震直前三十七人いたたつのこの子どもたちは、亡くなった子、大けがをした子こそいませんでしたが、大阪、名古屋、遠く九州など、各地に

避難していて、そのとき残っていたのは七人でした。(残っていたということは、適当な避難先がなかったということ、なんとか自宅で寝起きできる状態だったということです)。

あくる日(二月六日)からそのオレンジテント(子どもたちがそう名付けました)が七人の昼間の家になりました。

地震から二十日経って幹線道路はかたづけが進んでいましたが、私たちの日常つかう路地は傾いた電柱や瓦礫で危なかったし、倒れた家屋で塞がれたりもしていましたので、二人の指導員が手分けして七人を迎えるに行くことにしました。

その寒い朝、迎えに行つて「オーイ」と呼ぶと、白い息を吐きながら笑つて出てきた子どもたちの顔が忘れられません。でも一緒に歩く公園までの道すがら、子どもたちは瓦礫になった家々を指して「ここは〇〇君のうちやねん」とボソッと言います。「それで〇〇君は大丈夫やったんか」

とたずねると、「ウン、そこに書いてるやろ」とベニヤ板や、ひっくり返った冷蔵庫の白い扉に書いてある「全員無事です。〇〇に避難しています」を指します。そういうことが何度かあって大和公園に着き、テントを見た瞬間にまた子どもらに笑顔がもどりました。そういう風にして、オレンジテントでの「たつのこ」が始まりました。テントの前に炬をつくりました。たつのこの瓦礫の中から掘り出した大きなお釜をそこに据えしました。寒い日々、そこで沸かしたお湯は私たちだけでなく、まわりの人たち、公園を訪ねる人たちにも役に立ちました。飯盒炊きで鍛えた、焚き火の技術を子どもらは発揮しました。薪集めも喜々としてやりました。燃やすものはまわりにいくらでもありました。そういう木材のもとの姿を思いえがいてセンチになるのは私だけで、子どもらは倒壊家屋の家の人を見つけると、「この木、もろてもええですか？」と元気よくたずねていました。

子どもたちは煤と土でまっ黒になりました。でも、お風呂にも入ったのですよ。公園の隣が成徳小学校（たつのこのほとんどの子が在籍する小学校）で、そこに避難している人たちの末尾に加えてもらって「おふるツアー」に参加させてもらったのです。地震の被害の少なかった六甲山の北側の神戸市の施設にあるおふるに、ときどきバスで連れて行ってくれるツアーでした。

昼食は、すぐ近くで活動していた「元氣村」の炊き出しのお世話になることが多かったのですが、たまには「めしをつくらう」と手に入ったうどんで「たつのこ名物きつねうどん」をつくったりしました。

公園のテントでたつのこを再開した、ということを書いた「たつのこ通信」を避難先の人みんなに送ったので、各地に散らばっていた子どもたちから手紙も来るようになりました。「神戸市灘区大和公園内、オレンジテント」の宛先で、郵便配達

の方々はちゃんとたつのこに届けてくれたのです。「すぐわかりましたで」とニコニコして、わたしてくれる配達のおじさんいました。

手紙には、避難先で元気ですごしているけれど、早く帰りたい、みんなと会いたい、という内容が必ずどこかに書いてありました。

二月の終りごろから三月になると、小学校が部分的にしろ再開されたこともあって、子どもたちもポツポツ帰ってきて、たつのこの人数も「復旧」していきました。オレンジテントは、たつこの子だけでなく、大和公園のテント村、隣の小学校に避難している子どもたちのたまり場にもなっていました。

ボランティアの大学生たちもたくさん訪ねてくれました(その中には、今もずっと続けてたつこのに来てくれているお兄さんお姉さんいます)。

四月には新しい一年生も五人、たつのこに入ってくれました。

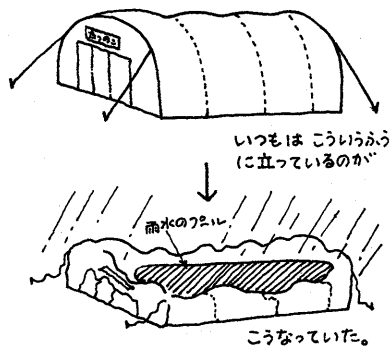
五月十二日、前日から大雨でした。オレンジテントは前にも書いたように柱が空気を入れて立っているテントなのですが、少しずつ空気が抜けた



▲オレンジテントの前で

り、温度差で、日中はシャンとしていても、朝方、夕方には、グニャッと萎えるので、付属のポンプで空気を補充するのです。前日空気を入れて帰ったのですが、その目テントに行くと下図のようになっています。屋根の部分に雨水が溜まり、その重みに、空気をつめた柱が耐え切れなくなつてつぶれ、そのつぶれたけれど空気の残っている柱と、テントの外周ぞいにおいた中の本箱などが、ちょうど「縁」になつて、さらに水が溜まり、プール状態になつてしまつたのです。なんちゅうこつちゃと毒づきながら、仕方ないので空気を抜いて「縁」を低くして水を流す。ちょうど帰ってきた子どもたちもつぶれたオレンジテントを見て一瞬びっくりしましたが「プールやっ」と目を輝かしました。まだ泳ぐ季節ではないのだけれど、飛び込みかねない様子です。それには私もつきあいかねるので、「てつだえー」と水を流す作業を続けました。おそろしい水量でした。まわ

り一帯に、ちょっとした小川ができました。すでにずっと小降りになつた雨の中で、新一年生たちはその小川でさっそく水あそびを始めています。やつと屋根の部分の水をのぞき終つて、柱に空気を入れるのですが、付属の足で踏むポンプは小さいので、これがなかなかいっばいになつてくれないう。もともと補充用で全部をこのポンプで入れるようにはなつていないのです。でも子どもたちと代わりばんこにポンプを踏み続けました。たっぶ



り二時間以上かかってテントを元の形にもどしました。中も予想したほどではなかったものの、かなり濡れてしまいました。その始末も手伝わそうとテントの外に出ると、雨は完全にあがっていて、子どもたちは遊びに夢中でした。あたりにくらでもある木切れや柄の折れたシャベルで、水溜まりからの水路をつくったり、泥まんじゅうをつくって投げあい、雪合戦ならぬ泥合戦。またたくまにビショビショのドロドロ。「お母さん泣くで、エエかげんにしとき」と言いかけて、もう電気来て洗濯機も動いとるはずやな、と思い「やめとけー」をやめました。

ボクら毎日「アウトドア」やと豪語するテントのたつのでしたが、雨の日と強い風の日は困りました。

95年七月にプレハブのたつのこに戻る事ができて、約半年間のオレンジテントのたつのこは終りました。半年ですんだということもありました

が(二年後の現在もテント生活を続けざるを得ない被災者もおられます)、テントのたつのこの生活は充実していました。まわりのテント村の人たちもとても優しく、テレビゲームや遊具はなくても(ないが故に)子どもたちは目いっぱい遊びました。

オレンジテントとその周辺は解放区でした。

たつのこの子どもたちにもそれぞれに地震による「いたで」があったでしょう。でも、子どもたちは比較的早い時期に集団をとり戻すことができ、そこで過ごす時間をもてました。あえてひっそるめて言っていますが、子どもたちは子ども同士で、その「いたで」をすばやく解消していました。

最初に書いたように、親たちと、たくさんの人々の力添えでできたプレハブで、たつのこの現在三十三人の子らは、元気です。今も。

(たつのこ学童クラブ指導員)